

幼児の造形表現や小学校図画工作における モダンテクニックについての考察

A study of modern techniques of the representation in arts for
preschool education and the arts and crafts class

薦 田 梓
(Azusa, KOMODA)

1. はじめに

モダンテクニックとは、様々な材料や用具を使って偶然にできた色や形を利用した表現技法である。シュルレアリスム^(註1)の作家たちが、従来の写実的な描画表現ではなく、自意識が介在できない状況下で絵画を描くことにより、無意識の世界を表現しようと試みたのが始まりである。シュルレアリスムの代表的な画家・彫刻家であるマックス・エルンスト (Max Ernst, 1891~1976) は、フロッターージュというこすり出しの技法を生み出し、デカルコマニー (合わせ絵) やコラージュ (貼り絵) を駆使した多くの作品を発表した。デカルコマニーは同時期の画家オスカル・ドミンゲス (Óscar Domínguez, 1906~1957) が発明した技法であり、コラージュは画家パブロ・ピカソ (Pablo Picasso, 1881~1973) や画家ジョルジュ・ブラック (Georges Braque, 1882~1963) が始めたと言われている。また、第二次大戦中にアメリカへ亡命したシュルレアリスムの作家たちから影響を受けた抽象表現主義^(註2)の代表的な画家であるジャクソン・ポロック (Jackson Pollock, 1912~1956) は、大きなキャンバスを床に置き上から絵具を滴らせるドリッピングという技法を使った作品で広く知られている。

このような表現技法は絵本にもよく見られる。例えば『はらぺこあおむし』¹⁾ や『うたが みえる きこえるよ』²⁾ の作者であるエリック・カール (Eric Carle, 1929~) は、トレーシングペーパー等の裏が透けて見える紙にアクリル絵具で彩色し、その紙を切り抜いてイラストレーションボードに貼りつけるコラージュという技法を用いている。また、スタンピング (型押し) やスクラッチ (ひっかき絵) 等も見られる。レオ・レオニ (Leo Lionni, 1910~1999) による『スイミー』³⁾ には、スタンピングやデカルコマニーの技法を確認することができる。

モダンテクニックは偶然できた表現をもとに想像を膨らませ、更に手を加えることによって新しい世界を作り出すことができるため、描写が苦手、もしくは観察して描くことの難しい年齢の子どもでも満足感の得られる創作活動ができることから、今日の幼児の造形表現や小学校図画工作で多く取り入れられている。また、客観的な見方でデッサンができるようになった大人にとっても、既存の描き方に捕らわれることなく自己を解放して想像することの喜びを体現することができるため⁴⁾

芸術療法等にも取り入れられている。

小学校教諭、幼稚園教諭、保育士を目指す学生にとってモダンテクニックを体験し習得することは必須である。本稿では、本学の初等教科教育法（図画工作科）の授業で行われているモダンテクニックの演習の内容をもとに、指導方法や教育現場での活用法、意義について考察する。

2. モダンテクニックについて

モダンテクニックには次のような種類がある。各技法の詳細と指導上の注意点について解説する。ここで紹介する技法は主に図画工作の教科書に掲載されているものであり、この他にも様々な技法がある。

（1）コラージュ（貼り絵）

糊で貼り付けるという意味のフランス語 collage が名前の由来である。紙・新聞・布・糸・針金・枝等、様々な材質や色を持つ材料を切り貼りして構成する。（図1）

必要な材料と道具：様々なコラージュの素材、色画用紙（台紙）、ハサミ（もしくはカッターとカッターマット）、糊（枝などを紙に貼りつける場合は、糊では接着力が弱いので、必要に応じて木工用ボンドを使用する）



図1 コラージュ

（2）ドリッピング

筆に含ませた絵具を紙の上に飛散させて表現する技法。紙と筆が直接触れないことがこの技法の特徴である。また、作者のコントロールはある程度効くものの、絵具の飛び散り方によって意図しない効果が表れる。（図2）また、垂らした絵具が溜まっているところヘストローで息を吹きかけ模様を作る方法を吹き流しという。画用紙の上で吹いた色が他の色と混じり合ってしまう効果が生まれたり、面白い形が見えてきたりすることがある。⁴⁾ 紙を傾けて絵具を流す方法もある。周囲が汚れるため新聞紙を広めにひき、汚れても良い服装で行う。

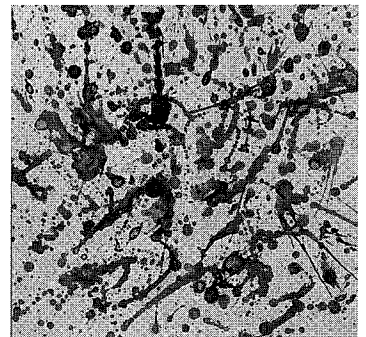


図2 ドリッピング

必要な材料と道具：水彩絵具、筆、パレット、水彩用バケツ、画用紙、ストロー、新聞紙

（3）フロッタージュ（こすり出し）

「こする」という意味のフランス語 frotter に由来する。板・畳・金網・硬貨、片ダンボールなど、凹凸のあるものの上に薄い紙を置き、その上から鉛筆やクレヨン等でこすって地肌を写し出す。タ

ンボで写し取る拓本もこの技法である。直接素材から触覚的に映す特徴がある。（図3）

必要な材料と道具：凹凸のあるもの、鉛筆またはクレヨン、薄い紙（やわらかくて薄い和紙が向いている）

（4）マーブリング（墨流し）

油で溶いた絵具や墨汁を水面にたらし、棒で静にかき回して濃淡のある縞模様を作り、上から吸水性のある紙を当てて写し取る技法。（図4）墨流しとも言う。15世紀頃にトルコで生まれたとされ、写し取られる模様が大理石（marble: 英）に似ていることからこの名が付いた。専用のマーブリング液が市販されている。マーブリング液には、赤、橙、黄、緑、青、黒があり白はないが、棒に少し油をつけ水面を触ることで透明の輪が広がり、白の表現が可能となる。

必要な材料と道具：マーブリング液、和紙、バット、棒（竹串など）、新聞紙（出来上がった紙をのせて乾燥させる）、フロート（使用しなくても可能であるが、液が沈むのを防ぐ役割をする）

（5）スクラッチ（ひっかき絵）

紙を鮮やかな色のクレヨンやパステルで塗り潰して下地を作り、上から黒を塗り重ねて釘や竹串などの先の尖ったもので引っ掻いて下の色を出す技法。（図5）下地に絵具やポスターカラーを使用しても良い。クレヨンよりもパステルの重ね描きの方がきれいにできる。表面がつるつるした紙の方が効果的であるため、画用紙ではなくケント紙を使うと良い。塗りつぶしは黒で行うことが多いが、黒以外の濃い色でも可能である。塗り潰す際にクレヨンのカスができるため周囲が汚れやすい。新聞紙をひき、汚れても良い服装で行う。絵本「くれよんのくろくん」⁵⁾はスクラッチを題材としている。幼児がスクラッチを行う前に読み聞かせるのもよい。

必要な材料と道具：パステル（クレヨン）、ケント紙、釘や竹串、新聞紙（完成後表面にニスを塗るとクレヨンがつかない）⁴⁾

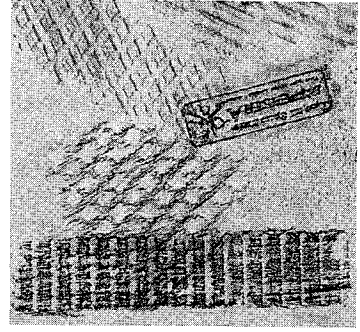


図3 フロッタージュ



図4 マーブリング

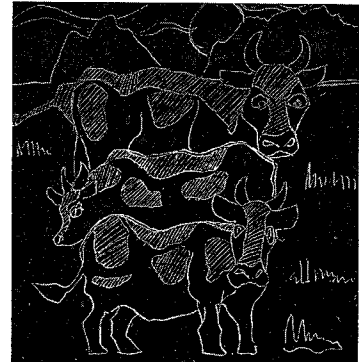


図5 スクラッチ

(6) バチック (はじき絵)

紙にロウをたらしたり、クレヨンやロウで描いたりした上から水彩絵具を塗るとクレヨンやロウの部分だけが弾かれ、面白い効果が得られる。蠟画ともいう。パステルよりもクレヨンの方が絵具をよく弾く。明るい色のクレヨンと濃い色の絵具を用いると効果的である。(図6)

必要な材料と道具：クレヨン (ロウ)、水彩絵具、筆、パレット、水彩用バケツ、画用紙

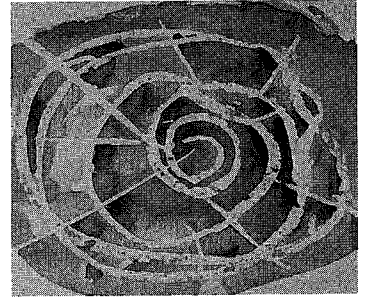


図6 バチック

(7) ステンシル (切り抜き版画)

防水した厚紙を切り抜いて画用紙の上に置き、その上から刷毛やローラーで絵具を塗ったり、霧吹きで吹き付けてばかしたりする技法。型紙版ともいい、染色にも用いられる。(図7) 専用のステンシルシートというコーティングされた紙もあるが、画用紙で可能である。

必要な材料と道具：水彩絵具、筆、パレット、水彩用バケツ、画用紙、はさみ (もしくはカッターとカッターマット)

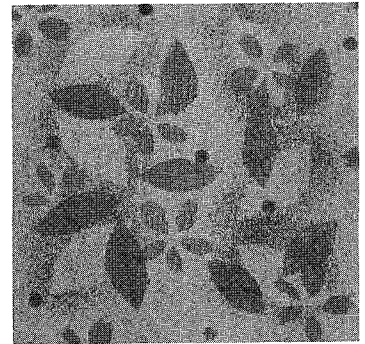


図7 ステンシル

(8) スパッタリング (霧吹き)

絵具を細かな目を持つ網に塗り、それをブラシでこする (あるいは目の細かな網を、絵具をつけたブラシでこする) ことで、小さな粒子として絵具を飛ばす技法。エアブラシよりも荒い粒が得られる。(図8)

必要な材料と道具：金網、ブラシ、水彩絵具、筆、パレット、水彩用バケツ、画用紙、はさみ (もしくはカッターとカッターマット)

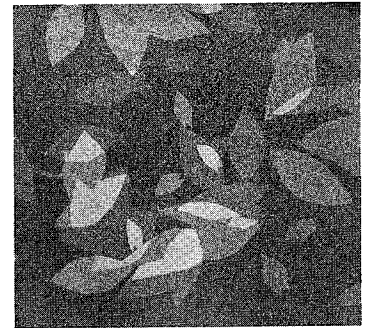


図8 スパッタリング

(9) スタンピング、プリンティング (型押し)

自然物や人工物に絵具をつけ、ハンコのように押して写す技法。配列や配色を考えて押せば美しい模様ができる。古くから染色にも用いられている。ピーマンやオクラ、レンコンの断面を使った野菜の断面や、プチプチ、キャップ、トイレットペーパーの芯、落ち葉、手のひらなど様々な素材を使用できる。(図9)

必要な材料と道具：版になるもの、水彩絵具、筆、パレット、水彩用バケツ、画用紙

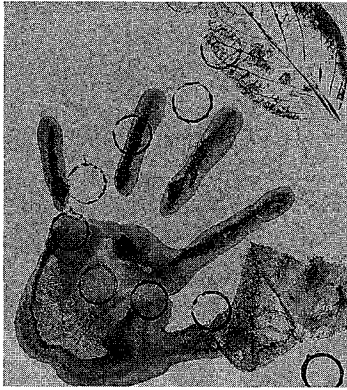


図9 スタンピング

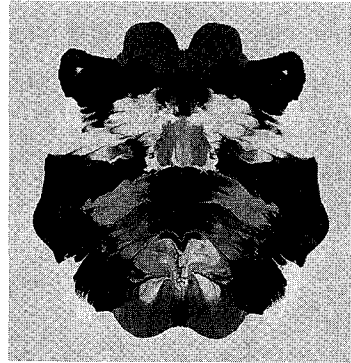


図10 デカルコマニー（1）

（10）デカルコマニー（合わせ絵）

転写するという意味のフランス語 *décalquer* に由来する。画用紙の上に何色かの絵具を垂らし、二つ折りにしてよく合わせてからこれを開いて左右対称の形を作る方法と（図10）、紙やカンヴァスに絵具を垂らし、乾かないうちにガラス板などの平面を当て圧力をかけ、絵具が押しつぶされて偶然にできる形や濃淡の効果を求める方法がある。⁴⁾（図11）

必要な材料と道具：水彩絵具、筆、パレット、水彩用バケツ、画用紙

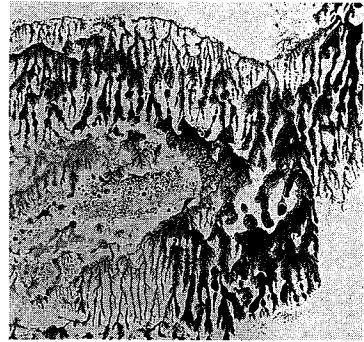


図11 デカルコマニー（2）

（11）フォトモンタージュ

色々な写真を切り抜いて組合わせ、全く違った意味を生み出す方法。写真のコラージュであるから、「フォトコラージュ」とも呼ばれる。（図12）

必要な材料と道具：写真（雑誌から切り抜いても良い）、糊、画用紙（台紙）、はさみ（もしくはカッターとカッターマット）

以上（1）～（11）が本学の授業で学ぶモダンテクニックである。これらの他にもフィンガーペインティング、シャボン写し等がある。

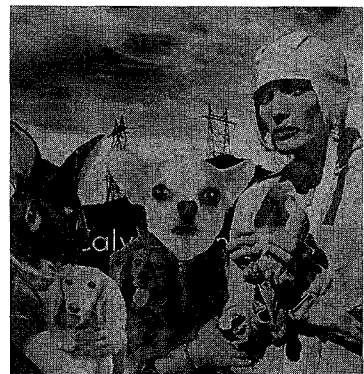


図12 フォトモンタージュ

（12）フィンガーペインティング

顔料を澱粉糊や粉石鹸などをメディウムにして作った絵具で、大きな紙やビニールシート等に指

や手を使って自由に描く。最後に画用紙に写し取る。絵具を手で混ぜ合わせ、色の変化や指の軌跡を楽しむ。無害であることと遊びの要素が大きいことから幼児教育用によく用いられている。汚れても良い服装で行う。

必要な材料と道具：ロール型のビニールシート（紙）、水彩絵具、澱粉糊、画用紙、雑巾

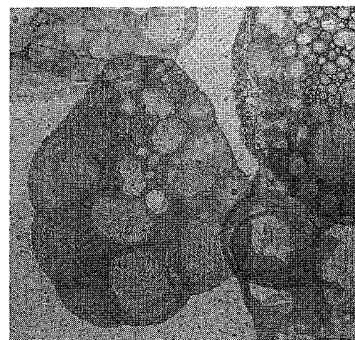


図13 シャボン写し

(13) シャボン写し

絵具で色を付けたシャボン液の泡を紙に写す技法。シャボン液に絵具を混ぜストローで吹くと泡が膨らむ。泡がコップの縁からあふれるほどになったら画用紙の上に乗せると、弾けたあと泡模様が紙に残る。(図13) 幼児が行う際は、液をストローで吸い込まないように注意する。

必要な材料と道具：シャボン液、水彩絵具、画用紙、紙コップ、ストロー

3. 教育現場での実践

小学校の学習指導要領にはモダンテクニックについての記述はないが、図画工作の教科書にはモダンテクニックを用いた作品が数多く掲載されている。例えば、東京書籍の『あたらしいずこう1・2』⁶⁾には、スクラッチ、パチック、スタンピング、フロッタージュ、ステンシルが、『新しい図工3・4』⁷⁾には、デカルコマニー、ドロッピング、スパッターリング、マーブリングの手順が図解で詳しく掲載されている。日本文教出版⁸⁾⁹⁾、開隆堂出版¹⁰⁾¹¹⁾も同様に1・2年生、3・4年生の教科書にモダンテクニックの手順が掲載されている。幼児の造形表現と小学校図画工作における実践例を紹介する。

●デカルコマニー

3～5歳児「デカルコマニーから…」

画用紙を半分に折り、広げて片方の面2、3か所に筆で水分の少ない水彩絵の具を置き、紙を閉じて再び広げてデカルコマニーを作る。子どもたちは染みから何に見えるかを考え、フェルトペンやクレヨンでかき加えて絵を作る。¹²⁾

●パチック

4・5歳児「パスで花火をつくろう」

画用紙にパスを使って思い思いの花火の絵を描く。藍色や黒色の水彩絵の具を全面に塗ると一瞬にして夜空に花火が浮かび上がる。¹²⁾

●フロッタージュ

1年生「でこぼこたんけんたい うつしてあそぼう」

学校の敷地内を歩いてみると、マンホールや送風口、木の幹等でこぼこをたくさん見つけること

ができる。まずは目で見て、手で触って、でこぼこを見つける楽しさを、次に薄い紙と色鉛筆、絵具を使って写し取る楽しさを思う存分味わう。色鉛筆の濃さや絵具の付け具合を変えて試す経験が、各学年の版画の活動に繋がっていく。¹³⁾

●コラージュ

2年生「ありさんの ほらあなたんけん」

紙を柔らかくなるまで揉み、はさみや手で色々な形に切ったりちぎったりする。画用紙の上でちぎってできた紙を並べたり繋いだり組み合わせたりしながら秘密基地を作っていくような感覚でアリの巣を作っていく。アリや思いついたことをクレヨンで書き足していき、お話を広げていく。¹⁴⁾

●シャボン写し

2年生「ふわふわ はじけたら」

誤飲を防ぐためにストローを3本つなげて長くし、色を付けたシャボン液を泡立たせる。容器の上から上がってきた泡を画用紙に写し模様を作る。できた模様の形から見立てをし、「○○の世界」として想像を広げる。思いに合わせて描画材を選び、描き加えていく。¹⁴⁾

●フォトモンタージュ

5・6年生「変身するぼく・わたし」

自分の全身を写した写真を切り抜き、気になる場所や物の写真に配置することで、巨人の引き出しの中に入ったり、水道の滝に打たれたり、その中に入り込むことができる。¹⁵⁾

4. 大学の授業での取り組み

本学の初等教科教育法（図画工作科）の授業では、学生はモダンテクニックを一通り体験した上で、テーマを決め一つのコラージュ作品にまとめるという課題に取り組んでいる。絵具や筆に触ること自体が久しぶりという学生も居るため、まずは幼児や児童が普段使っている材料や道具に慣れ親しみ、効果的な扱いを学ぶ。授業の流れは次のとおりである。

- ①約10～12cm 角の紙1枚ずつに、2で示した（2）～（10）の技法を施しパーツを作る。
- ②自分の表現したいテーマを設定し、様々な色の画用紙から1枚選び台紙とし、写真とパーツを切り貼りしていく。フォトモンタージュとして使用する写真は、自分の撮ったものでも雑誌からの切り抜きでも良い。台紙を繋げて2枚使用したり、パーツが台紙からはみ出したりしても良い。
- ③完成後、作品のタイトルを付ける。
- ④掲示板に全員の作品を掲示し鑑賞会を行う。（2018年度から Visual Thinking Strategies^{（註3）} という対話型鑑賞法を取り入れている）

各パーツ作りは図工に対して苦手意識を持った学生でも楽しんで制作する様子が見られ、改めてモダンテクニックの年齢や描画の巧拙に関係なく楽しめるという利点を感じた。色や表現が様々なパーツを使って一つの作品にまとめる段階になると苦戦している学生も見られた。風船・鳥・花など、パーツを同じ形に切って並べることでバラバラなイメージを統合している作品（図14）もあれ

ば、パーツをパッチワークのように繋ぎ合わせて一つの大きなものを表現した作品（図15）、模様から連想し様々な生物が泳ぐ海中を表現した作品、自分の感情を表した抽象的な作品など、多様な作品が出来上がった。

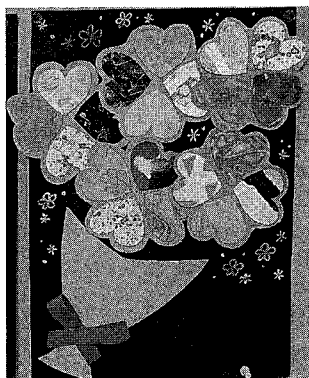


図14 学生によるコラージュ作品

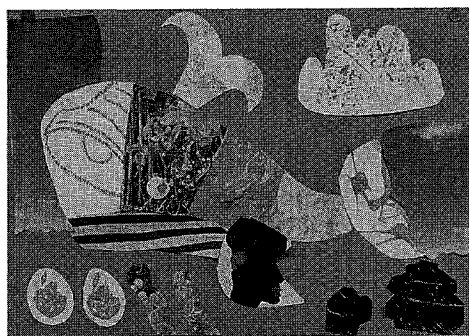


図15 学生によるコラージュ作品

初等教科教育法（図画工作科）の授業では最後のまとめ課題として、グループに分かれ小学校の図画工作の授業を想定した指導計画を立て、指導案の制作と模擬授業を行っている。今年度は11班のうち3つの班がモダンテクニックを取り入れた指導計画を立てた。A班は3年生の児童を想定し、題材名を「自分だけのモチモチの木をつくろう」とした。この題材は3年の国語科で習う「モチモチの木」に関連させ、物語から感じ取ったイメージを絵画で表現するというものである。主人公と同じように勇気を出した経験を思い出しながら、完成時のイメージを膨らませていく。木の幹と枝の部分は黒画用紙を切って画用紙に貼りつけ、空の様子や灯された情景の部分に既習のモダンテクニック（ドロッピングやステンシル等）を取り入れながら自由に描く。他教科と関連することで児童が取り組みやすい題材となっている。B班は1年生の児童を想定し、題材名を「スタンプのもようずかん」とした。この題材は丸めた新聞紙に絵具を付け、和紙に押し付けることでできる偶発的な模様から、何かに見立て絵に表すというものである。スタンプの色や形、配置から想像を広げ、見立てたものをクレヨンで書き足し完成させ、最後にクラス全体で一つの作品「スタンプのもようずかん」を制作する。C班は3年生の児童を想定し、題材名を「おしゃれなカラスを作ろう」とした。この題材はイソップ寓話「おしゃれなカラス」をもとに黒画用紙をカラスの形に切抜き、羽のイメージを膨らませ、身の回りにあるものを材料として羽をコラージュしていくというものである。カラーテープや色紙、葉っぱ、綿、モールなど様々な材料に触れ、それぞれの色や形の面白さを感じながら自分の考えるおしゃれなカラスを表現していく。どの班も、授業の前半で学んだモダンテクニックを活かし、子どもたちへの指導に応用した題材となっている。

5. モダンテクニックの意義

モダンテクニックの利点として、次のことが挙げられる。

- ・描写が苦手、もしくは観察して描くことの難しい年齢の子どもでも満足感の得られる創作活動ができる⁴⁾
- ・客観的な見方でデッサンができるようになった大人にとっても、既存の描き方に捕らわれることなく自己を解放して想像することの喜びを体験することができる⁴⁾
- ・多様な表現方法を知ること、作品の表現の幅が広がる
- ・抽象的な表現に触れ、興味を持つきっかけとなる
- ・造形活動を通して道具の正しい使い方や描画素材の特性を学ぶ機会が得られる

モダンテクニックのような造形活動は、幼児期の教育において5領域「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」と常に関連させながら考えていく必要があるが、中でも「表現」に最も関連している。幼稚園教育要領¹⁶⁾や保育所保育指針¹⁷⁾（3歳以上）、幼保連携型認定こども園教育・保育要領¹⁸⁾（3歳以上）の「表現」の内容は共通しており、「（1）生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。（4）感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。（5）いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。（7）かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。」と示されている。自発的に色や形、材料と関わる過程が大切であり、必ずしも作品にすることを目的としていない。例えばスタンプングではピーマン等の野菜や、落ち葉、手のひら等、身体や身近な素材の形の面白さを発見することができる。フロッターージュでは凹凸を見つけてまず手触りを楽しみ、その後紙に写し取る行為と浮かび上がった模様を楽しむ。触覚、視覚以外にも、凹凸を写し取る時の鉛筆やクレヨンが奏でる音やリズムも幼児の感性を刺激する。松岡宏明は幼児の造形活動について、「造形活動とは自ずと手指および体全体を起動させる活動であり、身体機能と深い関わりを有している。描くこと、つくことは、自分の周囲のものごとやできごとに関心や興味を持つことから始まり、もの・ことをよく見る、知るといった認知機能が刺激される。さらに驚きや喜びを描いたりつくったりすることで深く味わい、感じたことを表現し、伝えようとするを通して感受性や感情の発達が促される。また、子供は描いたり、つくったりを通して自分と他者、あるいはもの・ものごととの関係性を築いていく。造形活動はコミュニケーションであり、それは社会性を育てていく。」と述べている。¹⁹⁾このように、幼児の造形活動は総合的な性格を持っており、発達に欠かせない要素を含んでいる。

平成29年に告示された小学校学習指導要領²⁰⁾では、図画工作科の目標として、「表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。（1）対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して理解するとともに、材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的に

つくったり表したりすることができるようにする。(2) 造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて考え、創造的に発想や構想をしたり、作品などに対する自分の見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。(3) つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培う。」と示されている。見方・考え方とは、各教科の特質に応じた物事を捉える視点や考え方のことであり、図画工作科では「造形的な見方・考え方」を、感性や想像力を働かせ、対象や事象を形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値を作り出すこととしている。今回の改訂では、児童が造形的な見方・考え方を十分に働かせることを一層重視した内容となっている。小学校図画工作におけるモダンテクニックは、技術的な巧拙が表れにくいことや子どもたちにとって新鮮な体験であることから、小学校低学年では造形遊びとして行われることが多い。中高学年になると、モダンテクニックを施した紙からイメージを膨らませ、様々な形や色を切り貼りすることによって一つの平面作品に仕上げるような場面が多く見られる。例えばフロッタージュでは模様を写し取って楽しむだけでなく、できた模様や形を色々な方向から見たり組み合わせることで何かに見立て、切り取ったり描き加えたりしながら世界を広げていくような展開が考えられる。デカルコマニーやシャボン写しも同様に、身近にある材料を使って偶然できた色や形から想像を広げることで、発想・構想する力、自分の思いに合わせて用具や表し方を工夫する力、一度作ったものから新たなものを作り出そうとする力を育むことができると考えられる。

6. おわりに

指導者を志す大学生がモダンテクニックを学ぶ際は、単なる表面的な技法体験ではなく、その行為自体の楽しさや魅力も含めて習得し、教材への展開方法まで考えていく必要がある。授業でモダンテクニックを扱う指導者は、技法の習得ばかりに気を取られ、技法を使うことを条件として作品を作らせてしまうなど、子どもが本来持っていた想いや表現の幅を狭めてしまうことのないよう注意すべきである。モダンテクニックはあくまでも幼児や児童の表現の幅を広げる手立てとして用いられるべきであり、なによりも子どもたちが創造する純粋な喜びを感じ、色や形の面白さを味わうことが重要である。

註

- (註1) 超現実主義。アンドレ・ブルトンの1924年の「宣言(第一宣言)」で広く知られるようになった。ジークムント・フロイトの「無意識」を思想的背景として、人間が意識によって捉えられる現実世界を超えたものを追求する芸術運動で、文学、美術はもちろん思想的にも大きな影響力を持った。
- (註2) 1950～60年代にニューヨークに出現した抽象絵画の傾向に与えられた名前。「ニューヨーク・スクール」とも呼ばれる。幾何学的抽象に反発して、タッチやマティエールそのものの躍動感や質感を重視し、大画面に筆跡や絵具のしたたりを均等に配していくオール・オーバーと呼ばれる方法が特徴。
- (註3) フィリップ・ヤノウイン氏(元ニューヨーク近代美術館教育部長)が開発した、アートを通じて鑑

賞者の「観察力」「批判的思考力」「コミュニケーション力」を育成する教育カリキュラムのこと。鑑賞者に3つの問いかけをして（①この作品の中で、どんな出来事が起きているでしょうか？②作品のどこからそう思いましたか？③もっと発見はありますか？）対話することで、鑑賞への積極的な参加を促すことができる。

参考・引用文献

- 1) エリック・カール (1976)『はらぺこあおむし』もりひさし訳
- 2) エリック・カール (1981)『うたがみえる きこえるよ』もりひさし訳
- 3) レオ・レオニ (1969)『スイミー』谷川俊太郎訳
- 4) 鎌倉女子大学 (2018)『大学生が学ぶ 図画工作・造形表現』
- 5) なかやみわ (2001)『くれよんのくろくん』
- 6) 東京書籍 (2011)『あたらしいずこう1・2』
- 7) 東京書籍 (2014)『新しい図工3・4』
- 8) 日本文教出版 (2010)『ずがこうさく1・2上下』
- 9) 日本文教出版 (2010)『図画工作3・4上下』
- 10) 開隆堂出版 (2014)『ずがこうさく1・2上下』
- 11) 開隆堂出版 (2014)『図画工作3・4上下』
- 12) 東山明 (2005)『表現活動を豊かにする絵画・製作・造形あそび指導百科』
- 13) 日本文教出版 (2015)『図工のひきだし全国の図画工作実践事例集第1学年』
- 14) 日本文教出版 (2015)『図工のひきだし全国の図画工作実践事例集第2学年』
- 15) 東京書籍 (2011)『新しい図工5・6』
- 16) 文部科学省 (2018)『幼稚園教育要領解説』
- 17) 厚生労働省 (2017)『保育所保育指針』
- 18) 文部科学省・厚生労働省 (2017)『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』
- 19) 松岡宏明 (2009)『美術教育概論』大橋功編著
- 20) 文部科学省 (2017)『小学校学習指導要領解説』